選んだ私の世界と娘

仲村ゆうな

【あらすじ】

三十歳の佐藤唯香は、順調にキャリアを積んでいる。しかし彼氏の木元裕太と結婚の話が出ると、仕事と私生活の選択に頭を悩ませていた。

そんなとき、唯香の目の前に二人の子どもが現れる。二人はパラレルワールドから来た唯香の娘たちだった。

唯香が二十歳で出産した世界線の娘「あゆちゃん」と、二十五歳で出産した世界線の娘「みーちゃん」は夏休みの自由研究のため、独身の世界線の唯香と生活することに。

この世界線の父親の姿を見たいという娘たちにねだられ、唯香は元彼たちに会いに行く。二十歳の時の元彼、田沼良平、二十五歳の時の元彼、土谷周人に会った唯香は、意外にも子ども好きな良平、いい父親になった周人を見て、過去の選択に思いを馳せる。

裕太と結婚の話が本格的になったところに、会社で新プロジェクトの話が出る。だが唯香はすぐに返事はできなかった。

そんな中、実家から呼ばれ二人の娘を連れて帰省する。周囲から結婚を急かされるが、今後の人生プランに悩む。計画的に生きたいと考えるが、姉の明日香が不妊治療をしているという話を聞き、考えを改める。

始業式が近づき、元の世界に戻ることになった娘たち。迎えに来たのはパラレルワールドの唯香の父、孝義だった。別世界では孝義は学者になり、世界線を行き来できる法則を見つけていたのだ。

ついに帰ることになったが、あゆちゃんが姿を消す。なんとか見つけ出したものの、帰りたくないと駄々をこねる。あゆちゃんがパラレルワールドから来た本当の理由は、自分が産まれてきてよかったのかを確かめるためだった。自分のせいで母は夢を諦めたのではないかと思っていたのだ。それをすぐには否定できなかった唯香。唯香自身も、父が自分

のせいで夢を諦めたと思ったからだ。だが孝義が語る親の思いを聞き、唯香は自信を持ってあゆちゃんを説得する。別の世界へ娘たちを送り出した唯香は、自分の世界を生きるのだった。

【登場人物表】

佐藤唯香（30）　会社員
歩未（10）　唯香の娘
歩未（5）　唯香の娘

木元裕太（30）　唯香の彼氏
田沼良平（30）　唯香の元彼
土谷周人（32）　唯香の元彼

佐藤孝義（65）　唯香の父
佐藤洋子（60）　唯香の母
水田明日香（33）　唯香の姉
水田大地（33）　明日香の夫
平塚真弓（35）　唯香の上司
久保正孝（40）　唯香の上司
土谷幸太郎（3）　周人の息子

○アパート・部屋
ベッドの上にいる佐藤唯香（20）と田沼良平（20）。
唯香「ちょっと」
良平「うん？」
唯香「付けてよ」
良平「え、ダメ？」
唯香「ダメに決まってんじゃん。子どもできたらどうすんの」

○住宅街（夕）
子どもの声「ママ―！」
パンツスーツ姿の唯香（30）、振り返る。
駆けて来た子ども、唯香の横を通りぬけて母親の元に向かう。
唯香、母親と子どもを見つめる。
手に持っていた資料を見る。
『女性のキャリア志向を支える食事の企画提案書』と書かれている。
唯香「よしっ」

○マンション・共用廊下（夕）
唯香、バッグを漁り鍵を取り出す。
歩未（10）「ママ」
唯香、振り返る。
歩未（10）と歩未（5）、手を繋いで立っている。
唯香、周りをキョロキョロ見渡す。
唯香「えっと……」
唯香、恐る恐る中腰になって歩未（10）に近づく。
唯香「どうしたの？」
歩未（10）「こんばんは」
唯香「あ、こんばんは」
歩未（5）「ママ」
唯香「お母さんとはぐれた？　ここの子？　何号室か分かる？」
歩未（10）・歩未（5）、唯香をじっと見つめる。

唯香「あ、えっと……、。こういうときは、警察？」
唯香、スマホを取り出す。
歩未（５）「おしっこー」
唯香「おしっこ？」

○同・キッチン（夜）
唯香、冷蔵庫の中を見ている。
唯香「何もない……」
唯香、奥から栄養ドリンクを取り出す。

○同・リビング（夜）
部屋を見渡す歩未（10）。
歩未（５）、入って来て歩未（10）の隣に座る。
唯香、キッチンから来る。
唯香「あのー、二人っていくつ？」
歩未（10）「十歳です。この子は五歳」
唯香「十歳と五歳……」
唯香、栄養ドリンクを見て、
唯香「じゃあダメだよね」
歩未（10）「あの、全然お構いなく」
唯香「よくそんな言葉知ってるね。あ、でもそうか。知らない人からもらったものの口に入れたくないよね」
歩未（10）「知らなくはないですけど」
唯香「え？」
唯香、歩未（10）と歩未（５）の顔をじっと見る。
唯香「名前は？」
歩未（10）「歩未です」
唯香「歩未ちゃん」
歩未（10）「歩いていく、未来に向かって」
唯香「え」
歩未（10）「と書いて歩未です」
唯香「……いい名前だね」
唯香、歩未（５）に向かって、
唯香「お名前、言える？」
歩未（５）「歩未です」
唯香「君も歩未ちゃん？　似てるから姉妹か

と」
歩未（10）「母親は同じですが、父親は違います」
唯香「……聞いちゃってごめん」
唯香、スマホを手に取る。
唯香「えと、今あのお姉ちゃんが……いやおばちゃん、がおまわりさんに電話してみるからね」
歩未（10）、唯香の手を止める。
唯香「うん？　どうしたの？」
歩未（10）、首を横に振る。
唯香「もしかして家出してきたとか？　まさか、虐待？　ならなおさら警察に」
歩未（10）「いえ、それはないです。ママは、私のこと、愛してくれてます」
歩未（10）、歩美（5）を見て、
歩美（10）「ね」
歩美（5）、頷く。
唯香「……いいママなんだね」
歩未（10）「あなたがママです」
唯香「……はい？」
歩未（10）「私たち、あなたの娘です」
唯香、自分のお腹を擦る。
唯香「え？　え？」
歩未（10）「正確に言うと、私はあなたが二十歳の時に結婚した世界線で産まれた娘。この子はあなたが二十五歳の時に結婚した世界線で産まれた娘です」
歩美（5）、手を振る。
唯香「うん？　え？」
歩未（10）「パラレルワールドって分かります？」
唯香「あ、あぁ、うん。もしもあの時ああしたらって、選択肢のぶん、どんどん世界が分岐していくんだよね。アニメで見た」
歩未（10）「私たちはパラレルワールドから来ました」
唯香「そんなことできるの？」
歩未（10）「私の世界では」
歩未（5）「みーちゃんとこも！」

唯香「信じられない……」
歩未（10）「何か証拠をって思ったんですけど、別世界のものは持ち込んじゃいけないことになってて。でも、歩未って名前が何より証拠になるかなと」
唯香「確かに将来娘ができたら歩未って名前にしようって思ってたけど。え、どうしてこの世界に？」
歩未（10）「夏休みの自由研究のテーマが、三十歳まで独身でいる世界線のママなんです」
唯香「テーマが壮大過ぎない？　別の世界では普通のことなの？」
歩未（10）「ついでに別世界の私も観察しようかと思って連れて来ました」
歩未（10）、歩美（5）を抱っこする。
歩未（5）「おでかけ好きー」
唯香「そんな朝顔の観察みたいに……。待って頭痛くなってきた」
歩美（5）「眠いー」
唯香「眠い？」

○同・寝室（夜）
ベッドで眠る歩未（10）と歩未（5）。
唯香「これって誘拐？　でも私の娘なのか」

○同・リビング（夜）
唯香、入って来る。
スマホの着信音。
唯香「（電話に出て）もしもし」

○繁華街（夜）
電話をしている木元裕太（30）。
裕太「唯香？　今飲み会終わったんだけどこのまま家行っていい？」

○マンション・リビング（夜）
唯香、寝室の方を見て、
唯香「あー、今日は……。そのー、仕事！ちょっと持ち帰って来てて」

裕太（電話）「また？　あんま無理しないでね」
唯香「うん」

○繁華街（夜）
裕太「唯香の部署忙しいもんね。でも結婚とかしたら少しはセーブさせてもらえそう？」
唯香（電話）「そんな、中途半端なことはできないよ」
裕太「そっか……」

○マンション・リビング（夜）
裕太（電話）「まぁ、この話はまた話そう。ちゃんと睡眠は取ってね」
唯香「うん、ありがとう。おやすみ」
唯香、電話を切りため息をつく。
歩未（10）「あの」
唯香、驚いて振り返ると歩未（10）が立っている。
唯香「うん？　どうした？　おしっこ？」
歩未（10）「いえ、違いますけど」
唯香「そっか」
歩未（10）「すみませんでした、急に来て」
唯香「ううん！　そんな！　子どもがそんなの気にしないの！」
歩未（10）「今の」
唯香「うん？」
歩未（10）「今の、ママよく言う。子どもが気にしないのって」
唯香「そうなんだ。えっと、ママ……、私か。そっちの世界の私は何て？　こっちの世界に来ること」
歩未（10）「行くからには徹底的に研究するようにって」
唯香「うわぁ、言いそう」
歩未（10）「だからあの、いていいですか？」
歩未（10）、唯香をじっと見つめる。
唯香「……もちろん！　たっぷり観察して！」
歩未（10）「夏休みの間、お世話になります」
唯香「はい！　こちらこそ！」

歩未（10）「じゃあおやすみなさい」
唯香「うん！　おやすみ！」
歩未（10）、寝室に向かう。
唯香、頭を抱える。

○同・寝室（朝）
眠っている唯香。
歩未（5）の声「ママ。ママ」
唯香「う、う～ん？」
目覚めた唯香、歩未（5）と目が合う。
歩未（5）「ママ！」
唯香「夢じゃなかった……」
歩未（10）、入って来て、
歩未（10）「おはようございます」
唯香「おはようございます……」
歩未（10）「八時ですけど、仕事とかって」
唯香「やばい！」

○住宅街（朝）
早足で歩く唯香・歩未（10）・歩未（5）。
唯香「私、スドウ食品ってとこで働いてて。隣に図書館あるからそこで待っててもらえる？」
歩未（10）「スドウ食品。知ってます」
唯香「本当？　そっちの私もスドウ食品で働いてるの？」
歩未（10）「いえ。ママはクリーニング屋さんでパートしてます」
唯香「そうなんだ」
歩未（5）「みーちゃんのママはお仕事してないよ」
唯香「そうなの？」

○図書館・入口前（朝）
唯香「よし、じゃあまたお昼休みに来るから」
歩未（10）「はい」
歩未（10）・歩未（5）、手を繋いで入口に向かう。
唯香「そうだ。歩未ちゃん！」

歩未（10）・歩未（5）、振り返る。
唯香「あ、そっか。んじゃあ」
唯香、歩未（5）を見て、
唯香「みーちゃん、お昼ご飯食べたいものある？」
歩未（5）「ハンバーグ！」
唯香、歩未（10）を見て、
唯香「あゆちゃんは？」
歩未（10）「何でも食べれます」
唯香「オッケー。（腕時計を見て）あぁ、もう行かなきゃ！　行ってきます！」
歩未（5）「いってらっしゃい！」

○会社・企画部
唯香、平塚真弓（35）の席に近づいて、
唯香「真弓さん」
真弓「どうした？」
唯香「真弓さんとこってお子さんおいくつでしたっけ」
真弓「六歳と三歳」
子どもの写真が飾られている真弓のデスク。
唯香「あの、子どもってご飯何食べるんでしょう。好きなものっていうか」
真弓「うーん、そうだなぁ。基本カレーは好きだよね。あとは味が分かりやすくいもの？　お子様ランチを想像するといいかも」
唯香「なるほど」
真弓「あれ、でも佐藤ちゃんが今企画してるのって働き盛りの女性がターゲットじゃなかった？」
唯香「これはその、プライベートで。親戚の子どもを預かることになって」
久保正孝（40）、近寄って来て、
久保「なになに。何の話？」
真弓「佐藤ちゃん、親戚の子預かるんだって」
久保「へぇ！　いいね！　子育ての練習になるじゃん」
唯香「かもですねぇ」

○図書館・テラス席

歩未（５）「これやだ」

唯香「え？」

歩未（５）の前にはハンバーグ弁当が置かれている。

唯香「じゃあこっちにする？　いやちょっと辛いか。他の買って来る？　何食べたい？」

歩未（５）、首を横に振る。

唯香「えー……。でもお昼は食べないと。なんか他に食べれそうなもの……」

歩未（10）「じゃあ私食べちゃおー」

歩未（10）、歩未（５）のハンバーグ弁当を手に取る。

歩未（10）「うわぁ！　おいしそー。んー！いい匂い！」

歩未（５）「……みーちゃんも食べたい」

歩未（10）「いいよ、はい」

歩未（５）、ハンバーグ弁当を食べ始める。

唯香「すごい……。あゆちゃんって小さい子慣れてるんだね」

歩未（10）「ママがよくこうやってたんです。おかげで好き嫌い無くなりました」

唯香「私が？　そんなことできるんだ……」

歩未（10）「それ、何食べるんですか」

歩未（10）、唯香の前の弁当を見る。

唯香「これ？　チンジャオロース弁当」

歩未（10）、ノートに書き込む。

歩未（10）「（書きながら）この世界線のママは中華が好き……」

唯香「学校の宿題なんだっけ？　私みたいなのがテーマで大丈夫なの？」

歩未（10）「世界線ごとの違いをまとめたら面白いと思うんです。なので」

歩未（10）、唯香を見て、

歩未（10）「この世界線の父親に会いたいんですけど」

歩未（５）「パパ！」

唯香「パパかぁ……」

歩未（10）「会えませんか？」

唯香「あの、この世界ではね、あなたたちのパパとは結婚してなくて。つまり、この世界線では元彼ってことになるのね。元彼と会うってのはちょっと」
歩未（10）「ダメですか？」
唯香「う、うーん……」

○（回想）アパート・部屋
ベッドの上にいる唯香（20）と良平（20）。
唯香「ダメに決まってんじゃん。子どもできたらどうすんの」
良平「まぁまぁ。なんとかなるんじゃん？」
良平、唯香を押し倒し、キスしようとする。
唯香「いやちょっと待って」
唯香、起き上がる。
唯香「あんたのそういう無責任なところ無理だわ」
唯香、身支度をして出て行く。
良平「えぇ！」
唯香「別れる！」

○（戻って）カフェ・店内
唯香、歩未（10）を見つめている。
唯香「あのとき……」
歩未（10）「何ですか？」
唯香「ううん！　なんでもない！」
歩未（10）「あ」
歩未（10）、入っていた良平（30）を見る。
良平、唯香に気づいて駆け寄って来る。
良平「唯香！　久しぶり！」
唯香「（目を合わせないまま）お久しぶりです」
良平「その子たちが親戚の子？」
良平をチラチラ見る歩未（5）。
唯香「うん、そう。夏休みの自由研究でいろんな職業の大人に話聞きたいんだって」
良平「田沼良平です。初めまして」

歩未（10）「初めまして」

× × ×

良平「えー、お仕事は建築士をしています。建築士っていうのは、えっとね」
歩未（10）「建物を建てる前に土地を調べたりするんですよね」
良平「よく知ってるね」
歩未（10）「父が、勉強してたので」
良平「そうなんだ！　いや大変だよねぇ。資格取るの」
歩未（10）、ノートに書き込む。
良平「（唯香に）でも連絡くれて嬉しいよ。大学卒業して以来だから何年ぶり？」
唯香「自由研究のために仕方なくだから」
良平「相変わらず素直じゃないんだから」
良平、肘で唯香をつつく。
唯香「（不機嫌そうに）私彼氏いるし」
良平「え、そうなの？」
唯香「結婚の話も出てるし！」
良平「落ち込むわ……」
唯香「はぁ？」
良平「いや俺もさ、あれから遊んだりしたけど、将来を考えられるのは唯香くらいだったから。唯香も同じ気持ちかと」
唯香「あんたとは将来なんか考えられなかったよ」
歩未（10）、唯香と良平をじっと見つめる。
唯香「あ、ごめん……」
良平「（分かっておらず）うん？」
良平、唯香と歩未（10）を見る。
歩未（5）を見ると、目が合う。
笑い合う良平と歩未（5）。

○駅前
歩未（10）「今日はありがとうございました」
良平「いえいえ。また何かあったらいつでも呼んで！」

唯香「もうないよ……」
良平「気を付けて帰ってねー」
唯香・歩未（10）・歩未（5）、歩き出す。
唯香「どうだった？　この世界のパパは」
歩未（10）「違いはあんまりありませんでした。仕事もほぼ一緒だし、見た目も変わらないし。次はもっと違うとこ見つけたいです」
唯香「また会うの？　うーん」
歩未（10）「ダメですよね……」
唯香「――いや、大丈夫！　気にしないで！」
歩未（10）「ありがとうございます」
唯香「うん」
歩未（5）「お腹空いたー」
唯香「あー、はいはい。帰ったらすぐご飯にしようね」

○マンション・リビング（夕）
唯香・歩未（10）・歩未（5）、入って来る。
裕太「おかえり！」
唯香「え、裕太？　来てたの？」
裕太「うん。連絡したんだけ、ど……」
裕太、歩未（10）と歩未（5）を見る。
裕太「この子たちは？」
唯香「あ、その親戚の子！　しばらくうちで預かることになったの！」
裕太「そうなの？　こんにちはー。唯香ちゃんの彼氏です」
歩未（10）・歩未（5）、唯香を見る。
唯香「あー、うん。そうなの。この世界ではね！」
裕太「うん？」
唯香「こちらはあゆちゃんとみーちゃん！」
歩未（10）「こんにちは」
裕太「よろしくね。お出かけしてたの？」
歩未（5）「パパに会って来たんだよ」
裕太「パパ？」
唯香「ご飯にしよっか！」

○同・キッチン（夜）
皿洗いをしている唯香。
裕太、来て、
裕太「寝たよ」
唯香「ありがとう」
裕太「元気いっぱいでかわいいね」
唯香「ね」
裕太「それにしても大変だね。いきなり子ども預かるなんて」
唯香「ちょっと、いろいろ事情があって」
裕太「俺も手伝うよ。休みの日とかどっか連れてくし」
唯香「あー、うん。でもしばらくはいいかな」
裕太「何で？」
唯香「夏休みの宿題で自由研究しないといけないみたいで」
裕太「だったらなおさら。俺理科得意だったし」
唯香「そういうんじゃないみたい。とにかく、私だけでも大丈夫だから」
裕太「……唯香、俺たち結婚したら支え合っていかなきゃいけないんだから。そういうのは無しにしようよ」
唯香「ごめん……」
裕太「まぁ俺はいつでも動けるから、遠慮しないで何かあったら言って？」
唯香「うん……」

○同・玄関（夜）
裕太「じゃあおやすみ」
唯香「うん、ごめんね。泊めれなくて」
裕太「全然。またね。今度はケーキでも買って来るから」
唯香「ありがとう」
裕太、出て行く。

○同・リビング（夜）
唯香、入って来る。
歩未（10）、ノートに書き込んでいる。

唯香「あれ？　どうしたの。眠れない？」
歩未（10）「いえ。忘れないうちに研究結果を書いておかないとと思って」
唯香「そっか」
唯香、歩未（10）の隣に座る。
歩未（10）「この世界のパパってどんな感じですか？　（唯香を指して）から見て」
唯香「私から見て？　まぁ、当時は若かったってのもあるけど、無責任で行き当たりばったりで、計画性がなくて」
唯香、歩未（10）の視線に気づいてハッとして、
唯香「ごめん。あゆちゃんのパパを悪く言うつもりは」
歩未（10）「ママもいつもパパの愚痴言ってます。責任感が無さすぎるって」
唯香「変わらないんだ、あいつ」
歩未（10）「はい」
唯香「どうしようもないね」
歩未（10）「今のママそっくり」
唯香「まぁ、ママだから？」
笑い合う唯香と歩未（10）。
歩未（10）、ノートを閉じる。
歩未（10）「寝ますね。おやすみなさい」
歩未（10）、寝室に向かう。
唯香「おやすみ」

○街中
良平「おっ、こっちこっち」
良平、手を振る。
唯香・歩未（10）・歩未（5）、駆け寄る。
歩未（10）「また来てくれてありがとうございます」
良平「いいのいいの。ね、唯香」
唯香「あー、うん」
良平「お昼は？　みんな食べた？」
唯香「まだなんだよね」
歩未（5）「ハンバーグ食べたい！」
良平「ハンバーグ食べたいかー。いいね」

歩未（５）「お姫さまバーグ！」
唯香「お姫様？」
歩未（10）「たぶんあれだと思います」
歩未（10）、指さした先に『ハンバーグレストランプリンセス』の看板。

○ファミレス・店内
店内は家族連れで賑わっている。
良平「俺たちも家族に見られてるかな」
唯香「バカなこと言わないで」
店員「お待たせいたしましたー」
店員、料理を運んでくる。
歩未（５）「わぁ！」
良平「お、うまそー」
歩未（10）「いただきます」
食べ始める一同。
良平「うん、久しぶりに食ったけどやっぱうまいな」
手が止まっている歩未（５）。
唯香「（気づいて）みーちゃん？」
歩未（５）「もういらなーい」
唯香「何で？　お腹いっぱい？」
歩未（10）「（こそっと）たぶんこの世界線では味が違うからだと思います」
唯香「え、そうなの？」
歩未（10）「はい。微妙に」
歩未（10）、ハンバーグを食べる。
唯香「あ、じゃあマッシュポテトだけでも」
歩未（５）「いつものカリカリのがいい」
唯香「付け合わせも違うのか。えっと、じゃあ」
良平「えー、じゃあおじちゃん食べちゃおー。おいしそー。ちょーだい？」
良平、歩未（５）の顔を覗き込む。
良平「あー、すっごいおいしそうだなぁ。食べたいなぁ」
歩未（５）、マッシュポテトを食べる。
良平「いいなー！」
歩未（５）、ニコニコで食べ始める。

×　×　×

ドリンクバーでジュースを注いでいる歩未（10）・歩未（5）。
その様子を席で見ている唯香と良平。
唯香「子どもの扱い上手いんだね」
良平「俺子ども好きだよ？　姉ちゃんの子とかよく面倒見るし」
唯香「知らなかった」
良平「俺ずっとパパになるのが夢だったんだよねー」
唯香「そういえば、言ってたかも」
良平「唯香と結婚してたら、あれくらいの子どもがいたのかな」
唯香「私は」
歩未（10）・歩未（5）、席に戻って来る。
良平「お、何取ってきたのー？」
歩未（5）「メロン」
良平「いいねー、俺も好きー」
歩未（10）、ノートを取り出す。
歩未（10）「あの、話聞いてもいいですか」
良平「もちろん。何でも答えますよ」
歩未（10）「二人は結婚しなくてよかったですか？」
唯香・良平「え」
歩未（10）「結婚しないって選択をして、よかったですか？」
唯香・良平、顔を見合わせる。
唯香「それは……」
良平「よかったかな」
唯香「ちょっと」
良平「俺、ダメダメだったから。唯香と別れてから、生き方を見直したんだよね。もっとちゃんとしようって。あのとき、唯香が止めてくれなかったら気づけなかったかも」
良平、唯香を見て微笑む。
良平「ね」
唯香「良平……」
歩未（10）「止めるって、何を？」

良平「あっとねー」
唯香「言わなくていい！」

○街中（夕）
　良平、歩未（５）を抱き上げる。
歩未（５）「キャー！」
良平「はーい、もうおしまーい」
歩未（５）「もっと！　もっと！」
唯香「みーちゃん帰るよ」
良平「宿題は進みそう？」
歩未（10）「はい」
良平「あゆちゃん頭良さそうだもんな。ママとパパも自慢でしょう」
　歩未（10）、微笑む。
唯香「じゃあ、今日はありがとう」
良平「うん。じゃあねー」
　良平、手を振って歩いていく。
唯香「また会う？　もっと聞きたいことあるなら全然」
歩未（10）「ううん。もう大丈夫です」
唯香「そう？」
歩未（５）「みーちゃんもパパに会いたい」
唯香「え」
歩未（５）「会いたいー……」
歩未（10）「あの、私もみーちゃんの方のパパに会いたいんですけど。研究内容に入れたいです」
唯香「二十五歳のときか……」

○（回想）マンション・寝室
　ベッドに横たわっている唯香（25）。
　土谷周人（27）、唯香に寄り添う。
唯香「行こうと思っても、身体が動かないの。もう、私なんて……」
周人「そんなこと言わないでよ」
唯香「だって働けなくて、お金もなくて。もう生きてけない」
周人「じゃあ、結婚しよう」
唯香「え？」
周人「ずっと、うちにいてよ。俺のそばにい

てよ」

○（戻って）公園

歩未（５）「あ！　パパ！」

周人（32）、歩いてくる。

周人「唯香ちゃん」

唯香「久しぶり、周人くん」

周人「元気そうでよかった」

歩未（５）「パパー！」

歩未（５）、周人の足に抱きつく。

周人の陰から土谷幸太郎（３）、顔を覗かせる。

幸太郎「こうちゃんのパパ！」

×　×　×

砂場で遊ぶ歩未（５）と幸太郎。

横のベンチに座る唯香・歩未（10）・周人。

周人「ご飯は？　ちゃんと食べてる？」

唯香「食べてるよ。あの後、部署異動させてもらえたんだ」

周人「（ホッとして）本当？」

唯香「忙しいけど、上司もいい人で。楽しんで仕事できてる」

周人「そっか。本当によかった……」

周人、歩未（10）を見て、

周人「あ、ごめんね。分からない話しちゃって。お仕事インタビューだよね。僕は文房具を作る会社で、経理っていって会社のお金を管理する仕事をしてます」

歩未（５）「パパは営業、なんだよ」

周人「そうなんだ！　僕も前は営業職だったよ」

唯香「異動したの？」

周人「出張とか多かったから。子どもができてから、異動希望出したんだ。子どもとの時間を作りたくて」

唯香「そっか」

歩未（10）「子どものせいで、やりたいこと

ができなくなったってことですか？」
周人「うーん、せいでってことはないかな。
僕が決めたことだから」
幸太郎、周人に泥団子を渡す。
幸太郎「はい」
周人「ありがとう」
周人、泥団子を手の平で転がす。
周人「子どものおかげで、自分の時間を考えるようになったんだ。僕は、仕事よりも家族と時間を過ごしたい」
周人、幸太郎に笑いかける。
唯香「よくこうやって遊んでるの？」
周人「うん。今は特に。二人目がお腹にいるから」
唯香「へぇ」
周人「唯香ちゃん、結婚は？」
唯香「まぁ今付き合ってる人と、するかも」
周人「そっか」
唯香「うん」
周人「……今度はちゃんと、唯香ちゃんのこと支えられる人ならよかった」
唯香「うん……」

○（回想）マンション・寝室
周人「じゃあ、結婚しよう」
唯香「え？」
周人「ずっと、うちにいてよ。俺のそばにいてよ」
唯香「……無理だよ。私今普通の生活だってできないのに」
周人「だからだよ。俺が唯香ちゃんを支えるから。専業主婦になればいいよ。それで子どもも作って、俺の帰りを待っててよ。そしたら病気だってきっと治るよ」
唯香「治らなかったら？　一生、このままだったら？」
周人「絶対治るよ」
唯香「絶対なんてない。周人くんだって、絶対ずっと私といてくれる保証なんてないじゃん！」

周人「俺は……」
周人、ドアに向かう。
周人「今日は帰るよ。ゆっくり休んで」
周人、出て行く。
唯香「待っーー（と言いかけてやめる）」

○（戻って）公園（夕）
歩未（10）「ありがとうございました」
周人「いいえ。宿題、頑張ってね」
唯香「ありがとう」
周人「うん。元気でね」
唯香「うん」
周人「ほら幸太郎、バイバイは？」
幸太郎「バイバイ」
唯香「バイバイ」
歩未（5）、周人の足に抱きつく。
唯香「みーちゃん」
歩未（5）「ヤダ！」
唯香「みーちゃん」
唯香、歩未（5）を抱き上げる。
周人「遊んでくれてありがとうね。バイバイ」
周人、幸太郎と手を繋いで歩いていく。
唯香「どうしたの、みーちゃん」
歩未（5）、唯香にしがみつく。

○住宅街（夕）
歩未（5）「みーちゃんのパパ、いっぱい遊んでくれない」
唯香「そうなの？」
歩未（5）「お仕事で遠く行っちゃう」
唯香「そっちの世界線だとまだ営業職なんだもんね。……ママは？」
歩未（5）「ママは遊んでくれるよ。でもいっぱい遊ぶと疲れちゃうからいっぱい遊べない」
唯香「そう」
歩未（5）「だからね、夏休みはお出かけすることにしたんだ」
唯香「……ごめんね」
唯香、歩未（5）の手をぎゅっと握る。

歩未（10）、唯香を見つめる。

○マンション・リビング（夜）

裕太「おいしい？」

笑顔でシュークリームを頬張る歩未（5）。

裕太「よかった。あゆちゃんは？」

歩未（10）「すごくおいしいです！　これ駅前のケーキ屋さんのですよね？」

裕太「そうそう。あそこ、ケーキは微妙なんだけど、シュークリームはおいしいんだよね」

歩未（10）「あそこシュークリームは激マズなのに……。こんな世界があったなんて」

裕太「うん？」

唯香「ほらほらもう寝る時間だよ。食べたら歯磨きしておいで」

歩未（5）「はーい」

歩未（10）、歩未（5）を連れて洗面所へ向かう。

裕太「すっかりお母さんっぽくなったね」

唯香「（苦笑いして）そう？」

裕太「唯香も子どもほしくなった？」

唯香「うーん」

裕太「俺は欲しくなったよ。より気持ちが強くなった。俺と唯香にあんなかわいい子どもがいたら幸せじゃない？」

唯香「それは、思うけど」

裕太「……俺と結婚したくない？」

唯香「そんなことない！　他の誰より、裕太がいいよ」

裕太「（照れて）ありがとう」

唯香「ただ、タイミングが」

裕太「子ども産むなら、早めがいいかなと思うんだよね。唯香の身体も心配だし」

唯香「そう、だね」

○同・寝室（夜）

唯香「はーい寝るよー」

歩未（5）・歩未（10）、ベッドに寝

転ぶ。
歩未（10）「なんだか元気ないみたい」
唯香「私？」
歩未（10）、頷く。
唯香「そんなことないよ。ほら！　元気いっぱーい！」
歩未（10）、唯香をじっと見つめる。
唯香「（微笑んで）子どもがそんなの気にしないの。おやすみ」
歩未（5）「おやすみなさーい」
歩未（10）「おやすみなさい」
唯香、微笑んで出て行く。

○会社・会議室
唯香・男性社員、入って来る。
唯香「失礼します」
久保「おぉ、来た来た。座って」
久保、唯香と男性社員に椅子を引く。
向かいに座る久保と真弓。
唯香「お話というのは」
真弓「実はね、社内で新規プロジェクトを立ち上げることになったんだけど」
久保「ヤマバ乳業さんと共同企画です！」
唯香「え！」
男性社員「マジっすか！」
唯香「数年前から真弓さんが温めてた企画ですよね？　実現できるんですか？」
真弓、笑顔で頷く。
唯香「すごい！」
久保「二人にチームに入ってもらいたいんだけど、どう？」
唯香「はいぜひ！　参加させてください」
男性社員「私も！　参加します！」
久保「よしよし」
久保、真弓にアイコンタクトを取る。
真弓、頷く。

○同・廊下
男性社員「頑張りましょうね！」
唯香「うん」

真弓「佐藤ちゃん」
唯香「はい」
真弓「ちょっといい？」
真弓、唯香に手招きする。

○同・会議室
真弓「私、佐藤ちゃんとは公私ともに仲がいいと思ってるのね。どう？」
唯香「もちろんです。真弓さんは異動してきてからずっと気にかけてくれて。私生活もずいぶん真弓さんに助けられて。上司というか、お姉さん的な存在です」
真弓「その関係性があるから聞くんだけど、佐藤ちゃんは結婚の予定ある？」
唯香「まぁ、そうですね。今の人と、そうなるかも」
真弓「子どもは、考えてる？」
唯香「いずれは？」
真弓「彼が子どもほしがってるって言ってたもんね。うん……」
唯香「あの？」
真弓「今回のプロジェクトは長期になると思うの。もしその間に産休とか育休とかなったら」
唯香「私は抜けないといけないってことですか？」
真弓「ううん。もちろん、佐藤ちゃんが必要だから席はちゃんと空けておく。育休明けだって、時短勤務でもうちは対応できる。でも、あなたが望むような働き方はできないかもしれない」
唯香「え……」
真弓「私が実際そうだったんだけど、妊娠って本当に身体が変わるの。産まれてからもいくら体力あっても足りないくらいで」
唯香「……」
真弓「会社としても、お母さんに無理はさせられないから」
唯香「私、頑張れます」
真弓「頑張りすぎたら、前と同じようなこと

になるかもしれないでしょ？」
唯香「それは……」
真弓「私は、それが一番心配なの。佐藤ちゃんは頑張りすぎて一人で抱え込んじゃうから。もうあんな顔見たくないの」
唯香「でも」
真弓「それにね、子育てに全てを注げないって、寂しいんだよね。うちは実家が近いから、母の協力があって仕事に集中できるけど、子育ては……。お仕事頑張ってるママかっこいいって言ってくれるから、救われてるけど」
唯香「私……」
真弓「私としては、ぜひとも佐藤ちゃんの力を貸してほしい。でも、そういう可能性があるってことで、確認しておきたかったの」
唯香「私は、どうしたらいいんでしょうか」
真弓「それればっかりは、私は何も言えない。あなたの人生だから」
真弓、唯香の肩を叩く。
真弓「少し考えてみて。返事待ってるから」
真弓、出て行く。
唯香、ため息をつく。

○同・企画部（夕）
男性社員「佐藤さん。決起集会で久保さんと飲むんですけど佐藤さんもどうですか？」
電話している久保。
久保「今日晩ご飯いらないや。うん。あ、それは残しといて！」
唯香「私はちょっと、帰らないと」
男性社員「了解です。また」
唯香「うん。お疲れ様でした」

○図書館・入口（夕）
唯香、歩いてくる。
歩未（10）・歩未（5）、気づいて手を振る。
歩未（5）、走って唯香に抱きつく。

歩未（５）「おかえりなさい」
唯香　「（微笑んで）ただいま」
歩未（10）「お仕事お疲れ様でした」
唯香「ありがとう」

○住宅街（夕）
手を繋いで歩く唯香・歩未（５）・歩未（10）。
唯香「ねぇ、みーちゃんのママはお仕事してないんだよね」
歩未（５）「そーだよ」
唯香「ママ、おうちにいて楽しそう？」
歩未（５）「ママいっぱいお菓子作ってくれる」
唯香「お菓子？　私にそんなポテンシャルが？」
歩未（５）「幼稚園のみんなもママのお菓子好きだよ」
唯香「へぇ。あゆちゃんのママはパートしてるんだっけ」
歩未（10）「はい」
唯香「忙しそう？」
歩未（10）「どうだろう。でも私が学校から帰ってくる前には帰って来てます」
唯香「そっか」

○マンション・リビング（夜）
夜ご飯を食べている唯香・歩未（10）。
歩未（５）。
スマホの着信音。
唯香、スマホを見ると、『お母さん』から電話がかかってきている。
歩未（５）・歩未（10）に背中を向けて電話に出る。
唯香「もしもし？」
洋子（電話）「唯香？　元気？」
唯香「元気だよ。どうしたの」
洋子（電話）「お盆は帰って来ないのかなーと思って」
唯香「いやぁ……」

唯香、歩未（10）と歩未（5）を見る。
洋子（電話）「帰ってきなさいよ。明日香も帰って来るって言うし」
唯香「今回はなぁ」
歩未（10）「（こそっと）あの、この世界のおばあちゃんにも会ってみたいです」
歩未（5）「ばーば！」
唯香「うーん……」

○電車内
横並びで座っている一同。
歩未（10）、ノートを見ている。
唯香「そっちの世界でもうちの実家と関わりある？」
歩未（10）「はい。ママパパがどうしても家いないときはばーばが泊まりに来てくれたり」
歩未（5）「みーちゃん、じーじばーばと住んでたことあるよ！」
唯香「そっちの私も実家が頼りなんだなぁ」
歩未（5）「あ！　鳥！」
歩未（5）、窓の外を眺めてニコニコしている。

○駅・ロータリー
唯香・歩未（10）・歩未（5）、歩いてくる。
佐藤洋子（60）、手を振る。
洋子「唯香ー」
唯香「お母さん」
洋子「この子たちが上司さんの子？」
唯香「そう。夫婦揃って盲腸で入院しちゃって。どこも頼れないからって」
洋子、歩未（10）・歩未（5）をじっと見つめる。
唯香「何？」
洋子「びっくりしちゃった。あまりにも唯香の小さいころにそっくりだから」
唯香「そ、そう？」
歩未（5）「ばーば」

歩未（５）、洋子に抱きつく。
洋子「かわいいー！　孫ができたみたい！」
唯香「あはは……」

○一軒家・玄関
洋子「唯香帰ってきたよー」
歩未（５）「おしっこ」
洋子「トイレね、その廊下を」
歩未（10）・歩未（５）、廊下を渡って右に曲がる。
洋子「あら」
水田明日香（33）・水田大地（33）、リビングから出て来る。
明日香「おかえり」
唯香「ただいま。（大地に）お久しぶりです」
大地「久しぶり、唯香ちゃん」
歩未（10）・歩未（５）、トイレから戻って来る。
明日香「お。あゆちゃんとみーちゃん？　こんにちは」
歩未（５）、明日香の顔をじっと見つめて、
歩未（５）「（何か言うが聞き取れず）ママ」
明日香「うん？　ママに似てる？」
大地「お菓子あるよ。おいで」
明日香・大地、歩未（10）・歩未（５）をリビングに連れて行く。

○同・リビング
洋子「裕太くんは連れてこなかったの？」
唯香「うん。ちょっと」
佐藤孝義（65）、入って来る。
洋子「あ、お父さん。ほら唯香。あとあゆちゃんとみーちゃん」
孝義「うん？」
孝義、歩未（10）・歩未（５）の顔をじっと見つめる。
唯香「上司の子！」
孝義「……そうか」
歩未（５）「じーじ！」

洋子「そ。じーじって呼んであげて」
孝義「うん」
孝義、ソファにもたれかかる。
明日香「ジューース飲む？」
歩未（５）「飲むー！」
洋子「はぁい。じゃあ用意しようね」

○同・玄関（夕）
女「スイカ持ってきたよー」
洋子「あぁ！　ありがとうー」
子ども「こんにちはー」
洋子「あれまーくん！　大きくなったねぇ」

○同・リビング（夕）
談笑している親戚一同。
ソファでうたたねしている孝義。

○同・台所（夕）
明日香「お父さんなんかますます、ぼーっとしてない？　大丈夫？」
洋子「延長雇用も終わって暇なのよ」
明日香「別に仕事に生きて来た人でもないのに」
洋子「まぁねー」
歩未（10）、入って来る。
歩未（10）「コップ無いって」
洋子「コップね。そっちの」
歩未（10）、食器棚からコップを持って行く。
洋子「なんだか初めてうちに来た気がしないね」
唯香「おばあちゃんちってだいたいどこも同じ構造なんじゃないかな」
明日香「そんなことある？」
女、入って来る。
女「明日香ちゃんも唯香ちゃんも久しぶりねー」
明日香「ご無沙汰してます」
女「あの子たち、唯香ちゃんの上司の子どもなんだって？」

唯香「はい」
女「見ない間に唯香ちゃん子どもができたのかと思っちゃった！　初孫おめでとう！なんちゃって！」
洋子「あはは」
女「その前に結婚か！」
唯香「（苦笑いで）あはは」
女「明日香ちゃんのとこは？　結婚して何年か経つでしょ。子どもは？」
明日香「まぁそのうち？」
女「子どもいた方が仕事に張り合いができるでしょ。ね！」
女、そうめんを茹でていた大地の背中を叩く。
大地「（笑って）そうですね」

○同・和室（夜）
仏壇に手を合わせる女と子ども。
女「お墓参りは十時だっけ」
洋子「そう。それで早めにお昼行けたらいいかなって」
女「そうだね。じゃあ、また。おやすみ」
明日香「はい、また」
大地、会釈する。
唯香「おやすみなさい」
歩未（５）、手を振る。
女・子ども、玄関に向かう。
洋子「そうだ、まーくんお菓子持ってって」
洋子、出て行く。
明日香「じゃあ私たちもホテル戻るわ。また明日」
唯香「うん」
大地「おやすみなさい。みーちゃん、おやすみ」
歩未（５）「おやすみー」
明日香「（笑って）おやすみー」
明日香・大地、出て行く。
唯香、仏壇の前に座る。
歩未（５）、唯香の膝の上に座る。
仏壇には何人かの写真が飾られている。

歩未（５）「知ってる人いる？」
唯香「うーん。おじいちゃんおばあちゃんくらいは。ひいとかになると会ったことないな」
洋子、入って来る。
洋子「あら。みーちゃん偉いね」
洋子、唯香の隣に座る。
歩未（５）「（写真を指さして）知ってる人いる？」
洋子「うん。おばあちゃんでしょ、おじいちゃんでしょ。ひいおばあちゃん、ひいおじいちゃん！」
歩未（５）「他の人は？」
洋子「会ったことはないけど、みんな知ってる人だよ」
洋子、歩未（５）の頭を撫でる。
洋子「この人たちがいなかったら、ばーばもいなかったかもしれないし、みーんなばーばの人生の登場人物」
洋子、歩未（５）の頬をつついて、
洋子「みーちゃんもね。お風呂入る？」
歩未（５）「入るー」
洋子、歩未（５）の手を引き出て行く。
唯香、仏壇の写真を眺める。

○同・リビング（夜）
歩未（10）、ノートに書き込んでいる。
唯香、入って来る。
唯香「研究は進んでる？」
歩未（10）「はい」
唯香「見てもいい？」
歩未（10）、ページをめくり唯香に見せる。
ノートには図や文字がたくさん書き込まれている。
唯香「すごいね。（ノートを読んで）うん、確かに」
唯香、歩未（10）に微笑みかける。
唯香「不思議だね。生きてるといろんな選択肢があって、ちょっとの違いでまるっきり

人生が変わっちゃうんだから。あゆちゃんになったり、みーちゃんになったり」

唯香、ノートを見て、

唯香「私と結婚するかしないかでも、結構変わっちゃうんだね」

歩未（10）「元彼の人たちと結婚したかったですか？」

唯香「まさか！　あ、ごめん。あゆちゃんのパパもいるのに」

歩未（10）「なんでこの世界では結婚しなかったんですか？」

唯香「何で……。何でだろう……」

歩未（10）、唯香をじっと見つめる。

唯香「良平の時は、お互い学生で結婚なんて考えられなくて」

歩未（10）「無責任だし？」

唯香「ま、まぁ。責任とか取れると思えなかったし」

歩未（10）、ノートを見て、

歩未（10）「二十五歳で結婚するかもしれなかった周人さんは？」

唯香「周人くんは……。私が、彼を信じられるほど強くはなくて、彼に頼り切るほど弱くはなかったから。結婚は考えられなかったかな」

歩未（10）「この世界では、裕太さんと結婚するんですか？」

唯香「……たぶん」

孝義、入って来る。

唯香「あ、お父さん」

孝義「うん」

孝義、ソファにもたれかかる。

しばらくしてうたた寝を始める。

その姿を見て笑う唯香と歩未（10）。

唯香「（笑って）あゆちゃんの世界のじーじも、こんなんでしょ？」

お風呂上りの洋子・歩未（5）、入って来る。

洋子「あゆちゃんお勉強？　偉いねー」

洋子、孝義を見て、

洋子「じーじね、昔大学の先生してたんだよ。ね！」
孝義「（目覚めて）うん？　うん」
唯香「そうだったんだっけ」
洋子「明日香と唯香が小さい時にサラリーマンに転職したからね。覚えてないでしょ」
唯香「うん。覚えてない」
洋子「だからよかったらじーじに勉強見てもらってね」
孝義「うん」
孝義、目を閉じる。
洋子「お父さん、こんなとこで寝ないで！もう！」

○霊園
洋子「あっついねー」
女「春日屋予約してくれたんだっけ」
子ども「お腹空いたー」
男「こっちの車乗る人ー？」
移動する親戚一同。
歩未（５）、明日香に近寄り、手を握る。
明日香「うん？」
ニコニコしている歩未（５）。
明日香、歩未（５）を見て微笑む。
明日香「大ちゃん、そっち繋いで」
大地、歩未（５）のもう片方の手を繋ぐ。
明日香「それー！」
明日香・大地、手を繋いだまま歩未（５）を持ち上げる。
キャッキャ笑う歩未（５）。
歩未（５）「もう一回！」
明日香「もう一回？」
大地「それー」
楽しそうな歩未（５）たちを見て微笑む唯香。

○料亭・個室
食事している親戚一同。

女「唯香ちゃんは結婚しないの？　彼氏いるんでしょう？」
唯香「まぁいますけど」
女「会ったんだっけ？」
洋子「前ね、一緒に帰って来たんだよね。感じのいい人だったよー。ねぇ、お父さん」
孝義、もくもくと天丼を食べている。
男「唯香ももう三十だっけ。子ども産むなら早めがいいぞ」
若い女「お父さん、それセクハラだよ」
男「年長者としてのアドバイスだよ」
若い女「今は女の人も働く時代だよ。古い考え辞めてもらえる？」
唯香「そう。今はやっと仕事が楽しくなってきて」
女「今の若い人は結婚出産以外に楽しいことがたくさんあるからねー。明日香ちゃんのとこもそうでしょ？」
明日香「まぁ」
女「明日香ちゃんの投稿見たよ。神社巡りしてるんだって？　いいねぇ、楽しそうで」
大地「あ、はい。ちょっと行ってて」
女「子ども出来たらそうもいかないからね。今のうちに自由を楽しんでおきな」
大地「そう、ですね」
女「唯香ちゃんも。今のうちよ、仕事に集中できるのは」
唯香、箸を置く。
唯香「そんなの……」
女「うん？」
洋子「唯香？」
明日香「あ、おじさん。またビールでいいですか？」
男「うん。お願い」
明日香「他飲み物おかわりする人ー？」
子ども「コーラ！」
歩未（５）「オレンジー！」
唯香、うつむいて刺身を食べる。
歩未（10）、唯香を見つめる。

○一軒家・リビング（夜）
テレビゲームをしている大地・歩未（10）・歩未（5）。
コントローラーを握っている大地・歩未（10）。
大地の膝の上に座っている歩未（5）。
大地「そうそう！」
歩未（10）「うわー！」
歩未（5）「みーちゃんもやりたい！」
孝義、ソファから三人の様子を眺めている。

○同・台所（夜）
洋子「じゃーん！」
洋子、キャニスターを掲げる。
中にはレモンシロップが入っている。
唯香「あ」
洋子「またもらっちゃったー。山田さんちから。自家製レモンシロップ」
明日香「やったー」
洋子「女子三人で飲んじゃお」
洋子、三つのコップにレモンシロップを注ぐ。
明日香「おいしいんだよねー。山田さんちのシロップ」
唯香「そうそう。サワーにすると最高なんだよね。夏の風物詩だね」
洋子「お母さんも、毎年これが楽しみになっちゃって」
洋子、三つのコップに炭酸水を注ぐ。
洋子「明日香は？　これでいい？」
明日香「うん」
洋子、明日香にコップを渡す。
明日香、コップを受け取って、
明日香「ありがとう」
唯香「飲まないの？　大地さん運転するんでしょ？」
明日香「うん」
洋子、残りの二つのコップに焼酎を入れ、唯香に渡す。

洋子「はい、カンパーイ」
コップを合わせる洋子・明日香・唯香。
洋子「うん、おいしい」
明日香「おいしいね」
洋子「前裕太くんがうちに来た時も飲ませたっけ」
唯香「どうだっけ」
明日香「飲ませてたよ。お母さん、自分で作ってないのに、得意げに」
唯香「そうだった、そうだった」
洋子「そうだっけ？」
明日香「唯香」
唯香「うん？」
明日香「裕太さんとは結婚するの？」
唯香「まぁ、ちょっと話は出てるけど」
洋子「そうなの？　あらぁ、おめでたいね」
唯香「まだ決まったわけじゃないから」
洋子「どうして？　裕太さんすっごくいい人だと思った。明日香も、ね？」
明日香「うん。何か引っかかってるの？」
唯香「……裕太、子どもほしいんだって」
洋子「そう……。まぁね、子ども好きだって言ってたもんね」
明日香「唯香だって、ほしくないってわけじゃないんでしょ？」
唯香「いつかは、ほしいけど。私は、ずっと今と同じくらいのペースで仕事を続けたい。でも現実的に厳しいのは分かってる」
洋子「そうね、子どもができたらどうしてもね」
唯香「それに、もしまた精神的に不安定になっちゃったら……」
洋子「唯香、あの頃と比べたら本当によくなったよ。顔色もいいし、笑顔も見れて」
唯香「でも、もしまたなったら？　あんな状態で子育てできるとは思えない」
洋子「唯香はちょっと完璧主義だからね。大丈夫。なんとかなるものよ」
唯香「なんとかしないといけないんじゃん！」
黙って聞いている明日香。

唯香「なんとかしないといけないときに、なんともできないときは？　そしたら、子どもがかわいそう」
洋子「でも」
唯香「私はちゃんと、準備が整ったタイミングで産みたいの」
明日香「……そんなタイミングよく子どもなんてできないから」
洋子「ま、まぁね。授かりものって言うしね！」
明日香「唯香はさぁ、考えが甘いんだよ」
唯香「私別に、ちゃんと考えてるよ！　考えてるからこんな悩んでるんじゃん！」
洋子「ね、唯香もね。考えてるよね。でも考えすぎもよくないから。ほら、また気持ちが落ち込んじゃったりするから」
明日香「仕事もしたいし、子どももほしい。なんかわがままじゃない？」
唯香「わがままなんて言われたくない！」
明日香「どっちも選べると思ってるのも、傲慢なんだよ！」
洋子「明日香」
明日香「……帰る」
　明日香、出て行く。
唯香「何でそんな言われなきゃ……」
　唯香、サワーを一気に飲み干す。
歩未（５）の声「もう終わり｜？」
大地の声「また明日ね。すみません、失礼します｜」
洋子「（玄関に向かって）はーい！」
　唯香、ぶつぶつ言いながらコップに入った氷を弄ぶ。
洋子「……明日香ね、赤ちゃんができないこと悩んでるみたい」
唯香「え？」
洋子「大地くんと結婚したとき、すぐに赤ちゃんほしいって言ってたでしょう。でもなかなかね、難しいのかな」
唯香「不妊治療とか、してるの？」
洋子「どうかな。お母さんにも言わないから。

でも、なんとなく分かるんだよね」
唯香「私、そんなの知らなかった……」
洋子「唯香もそんなに思いつめないでね。人生はどうなるか分かんないんだから」
洋子、出て行く。
唯香、ため息をつく。

○同・子ども部屋（夜）
唯香、壁に貼られた絵を眺める。
『題名かぞく』と貼られている子どもが描いたような絵。
歩未（10）、開いていたドアをノックする。
唯香「どうぞ」
歩未（10）、入って来る。
唯香「私とお姉ちゃんの部屋だったんだ。入ったことある？」
歩未（10）「あります。でも置いてあるノートとかは見ちゃダメって」
唯香「まぁ娘に見られるのは気恥ずかしいか」
唯香、ニコッと笑って歩未（10）を手招きする。
歩未（10）、唯香に近寄る。
唯香「まぁ私も恥ずかしくないわけじゃないけど」
唯香、本棚からノートを取り出して歩未（10）に見せる。
唯香「子どものときのポエムノート」
歩未（10）「ポエム？」
唯香「そ。あゆちゃんのとこの私も書いてたかな」
歩未（10）、楽しそうにページをめくる。
唯香「……ねぇ、あゆちゃんの世界の私って幸せそう？」
歩未（10）「え？　……ママは」
唯香「――まぁ幸せか！　こんなにかわいい娘がいるんだもん」
唯香、歩未（10）の頭を撫でる。

唯香「もっと見る？　秘密のノート」
歩未（10）、笑顔で頷く。
唯香「よしよし」
唯香、本棚を漁る。
一冊のノートに気づき、手に取る。
表紙には『シュガーシスターズの未来日記』と書かれ、シールがベタベタに貼られている。
唯香「これ……」

○ショッピングセンター・ゲームコーナー
クレーンゲームで遊んでいる歩未（5）・歩未（10）と親戚の子どもたち。
親子連れで賑わっている。
唯香「ここらへんは本当に変わらないね。遊ぶとこ、ここくらいしかないまま」
洋子「子どもたちはずっと飽きないみたいだから、使いやすいのよ」
明日香・大地、ペットボトルを持って来る。
大地「お母さん、お茶でよかったですか」
大地、洋子にペットボトルを差し出す。
洋子「ありがとう」
明日香「飲む？」
明日香、唯香にペットボトルを差し出す。
唯香「ありがとう」
唯香、明日香に目線は合わせずペットボトルを受け取る。
孝義、クレーンゲームで大きなぬいぐるみを取る。
子ども「すっげー！」
孝義「支点、力点、作用点を見極めれば簡単、簡単」
洋子「お父さんったらはしゃいじゃって」
唯香「ほんと」
洋子「あなたたちが小さい時もよく一緒にゲームしてたね」
明日香「まぁよく家にいるお父さんだったか

らね」
大地「いいお父さんだね。（ぼそっと）いいなー……」
明日香「……だね」
子ども「おばちゃーん！　お金ちょーだい！」
洋子「はいはい。（唯香たちに）いくらあっても足りないわね」
洋子、財布を持って子どもたちの方へ駆けて行く。
歩未（10）・歩未（5）、駆け寄って来る。
歩未（10）「ここってこんなにクレーンゲームが置ける場所だったんですね！」
歩未（10）、ノートに書き込む。
歩未（10）「（書きながら）別の世界では伸びしろ、あり……」
歩未（5）「これ取れた！」
歩未（5）、ウサギのストラップを持っている。
明日香「おー、すごいね！」
歩未（5）「（何か言うが聞き取れず）ママ」
明日香、しゃがんで歩未（5）の視線に合わせる。
明日香「（微笑んで）ママじゃないよー」
大地、しゃがんで明日香の肩を擦る。
歩未（5）「あげる」
歩未（5）、ウサギのストラップを差し出す。
明日香「ありがとー。私もらっていいの？」
歩未（5）、小さく首を横に振る。
大地「かわいいウサちゃんだねー」
唯香、明日香たちの様子を見つめる。

○一軒家・台所（夜）
洋子・明日香、テーブルの上でお菓子を見ている。
洋子「これは？」
明日香「じゃあ持って帰ろうかな」
唯香、入って来る。
明日香、気づくが目をそらす。

洋子「唯香とどれ持って帰るか相談しなさい」
明日香「え」
洋子、出て行く。
唯香・明日香、目が合うがそらす。
唯香「――あのさ」
明日香「ごめんね。あのとき私イライラしてて。つい唯香に当たっちゃった」
明日香、唯香を見て、
明日香「ごめんね」
唯香「いや私の方こそ、無神経だった。ごめんなさい」
明日香「ううん、唯香は何にも悪くないよ。私の方がね、ちょっと。こんな、こんなんだから……」
明日香、眉を下げて笑って、
明日香「ダメだねぇ」
唯香「ダメなんかじゃない。全然、お姉ちゃんは」
明日香「……ありがとう」
唯香「これ、見つけた」
唯香、ノートを差し出す。
表紙には『シュガーシスターズの未来日記』と書かれている。
明日香「（笑って）何これ」
明日香、ノートを手に取りページをめくる。
明日香「よく残ってたね。こんなの」
ノートには『シュガーシスターズのスケジュール』の題で、年齢別に出来事が書き込まれている。
唯香「二十歳になったらこうなって、三十歳になったらこうなってって。子どもの頃妄想してたよね」
明日香「（ノートを見て）二十歳で結婚。二十三歳で出産かぁ。うわ、次の年には三つ子産んでるし」
唯香「（ノートを見て）私は十六歳で結婚して、歩未を産んでる」
明日香「未来に歩いていくで、歩未ね」
唯香「姓名判断の本とか図書館で借りて来て

さぁ」
明日香「やったねぇ。子どものくせに自分の子どもの名前考えちゃってさぁ」
明日香、ノートを見つめて、
明日香「空」
唯香、明日香を見る。
明日香「空のように広い心を持ってほしい、で空。男の子でも、女の子でも」
唯香「……すごくいい名前だと思う」
明日香「でしょ？」
明日香、微笑む。
唯香「見て、ここ」
唯香、ページを指さす。
子どもの字で『計画にないことでも幸せなら可』と書かれている。
明日香「フフッ。これ書いたの唯香？」
唯香「お姉ちゃんでしょ」
明日香「えー、私もっと字きれいだったよ」
唯香「嘘ー」
明日香「幸せなら、か」
唯香「難しいよね、人生って。何なんだろう」
明日香「何かを選んだり、選べなかったり、それが人生じゃん？」
明日香、唯香の肩を抱く。
明日香「深いこと言おうと思ったけど言えなかった」
唯香・明日香、笑い合う。
明日香「ま、自分の人生を生きようってことよ」
唯香「うん」

○同・リビング（夜）
テレビゲームをしている大地と歩未（10）。
唯香・明日香、入って来る。
明日香「大ちゃーん。帰るよー」
大地「はーい。ごめんね、これでおしまい」
歩未（10）「楽しかったです！　こんな面白いゲーム初めて！」
大地「よかったらあげようか？　おさがりだ

けど」
歩未（10）「（首を横に振って）ううん」
大地「そう？　まぁ新品をサンタさんにお願いした方がいいかもね」
唯香「あれ、みーちゃん寝ちゃってる」
ソファで眠っている歩未（5）。
大地「いつの間に」
唯香「みーちゃーん。明日香ちゃんたち帰るよ」
歩未（5）「うーん……」
大地「じゃあ車回してきちゃおうかな」
明日香「うん。あ、荷物さぁ」
大地・明日香、出て行く。
唯香「みーちゃん」
歩未（10）「みーちゃん」
歩未（5）、目をこすりながらゆっくり起き上がる。
瞼が重く、寝ぼけている様子。
歩未（5）「そーちゃんは？」
唯香「うん？　誰のこと？」
歩未（5）「そーちゃんにウサちゃんあげるー」
唯香「そーちゃんって？」
唯香、歩未（10）を見る。
歩未（10）「私も分からないです」
歩未（5）「そーちゃんは、みーちゃんのいとこだよ」
唯香「え？」
歩未（5）「そーちゃんママ！」
歩未（5）、指さした先に明日香。
明日香「うん？　どうした？」
唯香「……ううん」
明日香「みーちゃん、あゆちゃん、またね」
歩未（5）「またね！」
○駅・改札前
洋子「お母さんたち、元気になってるといいね」
唯香「あはは、ほんとにねー」
洋子「またおいで。もうあゆちゃんとみーち

やんは本当の孫みたいなものなんだから」
歩未（10）「はい」
歩未（5）「ばーば！」
洋子「そうそう」
孝義、歩未（10）と歩未（5）の頭を撫でる。
孝義「またね」
唯香「よし、じゃあ行こうか」
唯香・歩未（10）・歩未（5）、改札に向かう。
洋子「唯香」
唯香「うん？」
洋子、唯香の手を取る。
洋子「自分の選ぶ道を信じなさい」
唯香「……うん」
歩未（10）・歩未（5）、手を振る。
洋子・孝義、手を振る。

○マンション・リビング
歩未（10）「みーちゃん、これは？　もう着ない？」
歩未（5）「うん」
歩未（10）、服を畳んでリュックにしまう。
唯香、入って来る。
唯香「何してるの？」
歩未（10）「荷造りです」
唯香「え？」
歩未（10）「そろそろ夏休みも終わりなので」
唯香「そっか、帰らないとか。早いね」
歩未（5）「おうち帰るー」
唯香「そういえばどうやって帰るの？」
歩未（10）「来た時と同じように」
歩未（5）「博士がスイッチ押すんだよ」
唯香「博士？」
歩未（10）「博士が作った装置で私たち別世界に来れたんです」
唯香「へぇ、すごい博士がいるもんだね」
チャイムの音。
唯香「あらあら」

唯香、壁のインターホンモニターを見る。
モニターには孝義が映っている。

○同・玄関
唯香、勢いよくドアを開ける。
孝義「うん」
唯香「お父さん！」
歩未（５）「じーじ博士！」
歩未（５）、駆け寄って孝義に抱きつく。
孝義「おー、平行世界その二の歩未ちゃんー。元気だったか？」
歩未（５）「うん！」
唯香「何でお父さんが」
歩未（10）「じーじ！」
孝義「お、うちの歩未も元気そうだなー」
唯香「え」
孝義「こっちの世界線の唯香か。どうも、別世界のお父さんです」

○同・リビング
歩未（10）「私の世界ではじーじは物理学の教授なんです」
歩未（５）「みーちゃんのじーじも」
孝義「それで博士じーじって呼んでるんだよな」
歩未（10）「じーじの発明で、パラレルワールドを行き来できるようになったんです」
唯香「そんなことできたの？」
孝義「法則を見つけてね。まぁ一応ノーベル賞ももらってて」
唯香「嘘！　お父さんが？　ただの平サラリーマンだったのに」
歩未（５）「じーじ何で来たの？」
孝義「うん？　じーじは歩未ちゃんたちを迎えに来たんだよ」
歩未（10）「約束の日まだじゃん」
孝義「せっかくだからじーじもこっちの世界を見たいなって思ってね」

○ファストフード店・店内

孝義、ハンバーガーを食べる。

孝義「うん。こっちの世界線ではバーベキューソースなのか」

孝義、ノートに書き込む。

歩未（5）「みーちゃんとこと同じ味」

孝義「うんうん」

歩未（10）、ノートに書き込んでいる。

孝義「知りたかったことは研究できたか？」

歩未（10）「……うん」

孝義「ちょっとじーじに見せて。ん？　この変わらない楽しさのゲームセンターっていうのは？」

歩未（10）「じーじんちの近くのゲームセンター」

唯香「ほら駅裏の。スーパーの上」

孝義「そういえば明日香と唯香が小さい頃よく遊びに行ってたなぁ。そんなに面白いのか。私も行ってみたいなぁ」

唯香「そっちのお父さんは行ったことないんだ。こっちのお父さんはしょっちゅうついて来てたけど」

孝義「この世界の私は？　何してるんだ？」

唯香「普通のサラリーマンだった。で、今は退職して、田舎でぼーっと」

孝義「……そうか。そっちを選んだか」

唯香「……思い出した。小っちゃいころ」

○（回想）一軒家・リビング

出て行こうとする孝義（38）。

孝義「じゃあ行ってくるよ」

洋子（33）、カバンを渡す。

唯香（3）、走って来る。

唯香「やだ！　だめ！」

明日香（6）、唯香を止める。

明日香「唯香、お父さんお仕事なんだよ」

唯香「（泣きながら）やだ！　お父さん！」

孝義、唯香を見つめる。

○（戻って）ファストフード店・店内
唯香「この世界のお父さんは、私の――」
歩未（５）「ねー」
歩未（５）、唯香の袖を引っ張る。
唯香「うん？」
歩未（５）「カリカリ食べたい」
孝義「おぉ！　ポテトもいいね。食べ比べてみたい」

○商店街（夕）
孝義、歩未（10）・歩未（５）と手を繋いで歩いている。
後ろから孝義たちについて行く唯香。
唯香「私のせいで……」
孝義、掲示板のポスターを見て、
孝義「お、花火大会だって」
歩未（５）「花火！」
孝義「ちょうど帰る前の日だから行けるな。行こうか、なぁ、唯香」
唯香「あ、うん」
孝義「歩未も花火好きだもんな」
歩未（10）「うん」

○会社・企画部
唯香、真弓のデスクに来て、
唯香「これ、午後の会議の資料です」
真弓「ありがとう」
唯香、自分のデスクに戻ろうとする。
真弓「佐藤ちゃん」
唯香「はい」
真弓「来月頭には、ヤマバ乳業さんとの顔合わせがあるから」
唯香「……はい」
真弓「どういう返事が来ても、私は佐藤ちゃんを応援するよ」
唯香「ありがとうございます」

○図書館・自習室
Ａ３の用紙に書き込んでいる歩未（10）。

歩未（10）「……できた」

○同・入口前（夕）

歩未（10）、図書館から出て来る。

唯香、歩未（10）に気づいて、

唯香「あゆちゃん」

唯香、笑顔で手を振る。

○住宅街（夕）

唯香・歩未（10）、並んで歩いている。

歩未（10）の手には丸めたA3用紙。

唯香「それは？」

歩未（10）「自由研究」

唯香「おぉ！　完成したの？」

歩未（10）、頷く。

唯香「お疲れ様。家着いたら見せて」

歩未（10）、小さく首を横に振る。

唯香「えー。まぁ恥ずかしいか！」

○マンション・リビング（夕）

唯香・歩未（10）、入って来る。

唯香「ただいまー」

孝義「おかえりー」

歩未（5）「おかえりー」

孝義「ごはん、用意しといたよ」

孝義、宅配ピザをテーブルに並べる。

唯香「あれ。冷蔵庫の中の好きに使っていいって言ったのに」

孝義「料理はどうもできなくて」

唯香「そっか。こっちのお父さんは家で作ってたから」

スマホの着信音。

唯香、スマホを見ると、『裕太』から電話がかかってきている。

○街中（夕）

裕太「あ、唯香？　明日の花火大会あるでしょ」

唯香（電話）「うん。あゆちゃんとみーちゃんと行くけど」

裕太「ちょっと、二人の時間作れないかな」
裕太、手に持っている小さな紙袋を見る。
中にはリングケースが入っている。

○マンション・リビング（夕）
唯香「……うん。大丈夫だよ」
裕太（電話）「本当？　ありがとう」
唯香「うん、じゃあまた連絡する」
唯香、電話を切る。
唯香「お父さん」
孝義「うん？」
唯香「明日ちょっと、途中で別行動してもいいかな。用事あって。すぐ戻るから」
孝義「うん。いいよ」
唯香「二人のことよろしく」
歩未（５）「花火楽しみ！」
孝義「楽しみだねー」
歩未（10）、唯香を見つめる。

○河川敷公園（夜）
多くの人で賑わっている。
屋台の焼きそばを食べている孝義。
孝義「うん、うん」
歩未（５）「食べたーい」
孝義、歩未（５）に焼きそばを食べさせる。
孝義「歩未も食べたいものがあったらどんどん言ってね。明日には帰るんだから悔いがないように」
歩未（10）「うん」
歩未（10）、唯香を見る。
唯香「うん？　何食べたい？」
スマホの着信音。
唯香、スマホを見る。
唯香「……お父さん、私ちょっと行ってくるね」
孝義「はいはい」
唯香、息を吐く。

○商業ビル・屋上（夜）
ビアガーデンが開催されている。
一人、席についている裕太。
テーブルには泡の消えたビールが二つ。
裕太、大きく深呼吸する。
リングケースを開いて婚約指輪を見る。
裕太「……よし！」
裕太、リングケースをしまう。
唯香、来る。
唯香「裕太」
裕太「あ！　こっち！」
唯香、席に着く。
裕太「ごめんね。あゆちゃんとみーちゃんは？」
唯香「おと……。まぁ、見てくれる人がいて」
裕太「そっか」
裕太、ビールを一気に飲む。
裕太「あ、唯香のも買っておいた」
唯香「ありがとう」
唯香、ビールを飲む。
唯香「ぬる」
裕太「ちょっと時間経っちゃったかも」
唯香「……それで」
裕太「（遮って）あー！　あと五分待って！」
唯香「……うん」

○河川敷公園（夜）
孝義「そろそろ花火始まるなぁ」
歩未（5）「花火！」
孝義「よかったなぁ！　帰る前に見れて」
歩未（10）「……」

○商業ビル・屋上（夜）
黙ってビールをチビチビ飲む唯香と裕太。
男の声「もう始まるんじゃない」
女の声「ほんとだ」
花火が打ち上がる。
歓声が上がる。
裕太、花火を見る。

裕太「よし」
裕太、リングケースを取り出す。
裕太「唯香！」
唯香「はい」
裕太、リングケースを開き唯香に差し出す。
裕太「俺は、人生をかけて唯香を幸せにします。俺と、結婚してください」
唯香、婚約指輪を見つめる。
裕太、心配そうに唯香を見つめる。
唯香「……私」
孝義の声「唯香！」
唯香・裕太、声のした方を向く。
孝義、歩未（５）を連れて駆け寄って来る。
唯香「お父さん！」
裕太「お父さん！　お久しぶりです！」
孝義「うん。うん？」
孝義、裕太をじろじろ見る。
唯香「ど、どうしたの？」
孝義「うちの歩未がいなくなった」

○河川敷公園（夜）
唯香「あゆちゃーん！」
孝義「歩未ー！」
花火が上がる中、多くの人でごった返している。
孝義「ちょっと目を離した間に姿が見えなくなって」
唯香「この人だかりじゃ……」
唯香、周囲を見渡す。
孝義「行きそうな場所とか分からないか？　母親の勘で！」
唯香「この世界では産んでないもん！　そっちこそ！　あなたの世界の孫でしょ？」
孝義「孫の面倒を見始めたのは最近で」
唯香「もう！」

○商業ビル・屋上
裕太の膝の上に座っている歩未（５）。

歩未（５）「これ何ー？」
歩未（５）、リングケースを手に持っている。
裕太「ちょ、待って待って！」

○河川敷公園（夜）
唯香「あゆちゃん……」
花火が上がる。
花火の光で照らされた歩未（10）が目に入る。
唯香「あゆちゃん！」
孝義「いたか？」
唯香、歩未（10）に駆け寄る。
唯香「大丈夫？　どこも怪我してない？　変な人とかいた？」
歩未（10）、首を横に振る。
唯香「よかった……」
孝義「よかった、よかった。見つけられなかったら帰れないところだったぞ」
歩未（10）「……帰りたくない」
唯香「え？」
歩未（10）「帰りたくないー！」
歩未（10）、しゃがみ込んで泣く。
唯香、しゃがんで歩未（10）の顔を覗き込む。
唯香「何かあったの？」
歩未（10）「（しゃくりあげながら）ママは、私のこと産まなきゃよかった」
唯香「ママが、そう言ったの？」
歩未（10）、首を横に振る。
歩未（10）「見てて、そう思う。ママは、私がいるから、自分のやりたいことできないし。全部、我慢してるみたい。そんで、ときどき、暗い顔してるから、パパと結婚して私を産んだこと、後悔してるんじゃないかって」
孝義「確かに、唯香は若くして妊娠して、大学を中退してからはずっと子育てに追われていた」
唯香「ちょっと」

唯香、孝義を睨む。

孝義「ごめん」

孝義、手で口を覆う。

歩未（10）「私を産まなかった世界線のママを見て、確かめたかったんだ。私を産んだママと、産まなかったママ。どっちが幸せか」

唯香「それで、こっちの世界に」

歩未（10）「産まなきゃよかった。ママは私のこと、産まなかったら、好きなことできて、楽しく暮らせてた」

歩未（10）、うつむいて嗚咽を漏らす。

唯香「……あゆちゃん」

唯香、歩未（10）の背中を擦る。

唯香「産まなきゃよかったなんて――」

大きな音とともに花火が上がる。

花火の光に照らされた唯香の口は閉じている。

唯香、黙って歩未（10）を抱きしめる。

○マンション・寝室（夜）

ベッドで眠っている歩未（5）・歩未（10）。

唯香、二人を見つめ布団を掛け直す。

○同・リビング（夜）

孝義、A3用紙を見ている。

『別世界線のママの研究』と題されてびっしりと文字で埋め尽くされている。

唯香、入って来る。

孝義「今日はいろいろごめんな」

唯香「ううん」

孝義が持っている用紙を見て、

唯香「それ」

孝義「歩未の自由研究」

孝義、唯香に用紙を見せる。

用紙の一番下には『研究結果：産まない方がよかった』と書いてある。

孝義「孫にねだられると弱くてなぁ。どうしても別の世界線に行ってみたいと言われて

連れてきたら。このためだったのか」
唯香「……」
孝義「まぁ何にせよ、無事見つかってよかった。あとは帰るだけだな。長い間、二人の面倒見てくれてありがとう」
唯香、首を横に振る。
唯香「私、あのとき」
唯香、息を吐く。
孝義「うん」
唯香「あのとき、私、あゆちゃんにそんなことないって言ってあげられなかった。産まなきゃよかったなんて、そんなことないって」
唯香、うつむいて拳を握りしめる。
唯香「その選択をした私を、信じて、そんなことないって、言えなかった」
孝義「……うん」
唯香「私は、何を選んだらいいのか分からない。何が正解なのか。だって……。だってお父さんみたいに」
唯香、孝義を見る。
孝義「私の世界のお父さんは、別の選択をして、それは、私のせいで」
唯香、涙が溢れる。
唯香「私があのとき、あんなこと言わなければ、お父さんは、あなたみたいに、好きなこと続けられたかもしれないのに。私のせいで」

○（回想）一軒家・リビング
明日香「唯香、お父さんお仕事なんだよ」
唯香「（泣きながら）やだ！　お父さん！」
孝義（38）、唯香を見つめる。
泣きじゃくる唯香（3）。
孝義、唯香を抱きしめる。

○（戻って）マンション・リビング（夜）
孝義「子どもがそんなの気にするんじゃない」
唯香「だって」
孝義「私は、家庭を顧みず、ただひたすらに

研究と向き合っていた。結果、数々の功績を手に入れたが、娘たちとの思い出は残らなかった」

孝義、唯香の背中を擦る。

孝義「気づいた時にはもう娘たちは大人になっていた。でも、自分の選んだ道に後悔はない。その選択をしたことで、孫の夏休みをサポートできるじーじになれたからな」

唯香「この世界のお父さんも、その選択をしていたら」

孝義、首を横に振る。

孝義「別の選択をした私も、誇りに思うよ。この世界の唯香を見て、そう思ったんだ」

孝義、唯香に微笑む。

○公園

孝義、手にリモコンのような機械を持っている。

孝義「よし、準備完了」

唯香「そんなんで行き来できるの？」

孝義「まぁな。別の世界ではな」

唯香「へぇ」

歩未（10）、丸めたA3用紙を持ってうつむいている。

唯香、歩未（10）を見るが、視線をそらす。

孝義「さて、準備はいいか？　歩未たち」

歩未（5）「はーい！」

歩未（5）、唯香に抱きつく。

歩未（5）「またね」

唯香、歩未（5）の頭を撫でる。

孝義、歩未（10）の顔を見て、

孝義「歩未？」

歩未（10）、答えずうつむいている。

孝義「ありがとうな、唯香。この世界の私によろしく」

唯香「うん」

孝義「じゃあ行くぞー」

歩未（5）、唯香に手を振る。

唯香、手を振る。

孝義「歩未」
歩未（10）、歩未（5）の手を取り、
孝義と手を繋ぐ。
孝義、リモコンのスイッチを押す。
徐々に身体が消えていく孝義・歩未
（5）・歩未（10）。
うつむいたままの歩未（10）。
唯香「――歩未！」
歩未（10）、唯香を見る。
唯香「最初に会った時、言ったでしょう？
ママは私のこと愛してくれてるって。そう
いうことなんだよ！」
歩未（10）、消えかかりながら、まっ
すぐ唯香を見つめる。
唯香「自分を信じて！」
孝義・歩未（5）・歩未（10）の姿が
完全に消える。
唯香、消えたあとを見つめる。

○別の公園
孝義・歩未（5）・歩未（10）の姿が
現れる。
孝義「よし、着いたぞ」
うつむいている歩未（10）。
孝義「じゃあこっちの歩未を送って来るから
ね」
孝義、歩未（5）の手を握る。
歩未（5）「早くママに会いたい！」
孝義「うん。（歩未（10）に向かって）つい
でに向こうの世界の私とも会ってくるから。
別世界の情報交換もしたいしな」
歩未（10）、頷く。
孝義「行こうか」
孝義、リモコンのスイッチを押す。
歩未（5）、手を振る。
孝義・歩未（5）の姿が消える。
立ち止まったままの歩未（10）。
唯香の声「歩未！」
歩未（10）、顔を上げると、唯香が駆
け寄って来る。

唯香「歩未！」
歩未（10）、唯香をじっと見て、
歩未（10）「――ママ！」
唯香、歩未（10）を抱きしめる。
唯香「お、ちょっと日焼けした？　あれ、じーじは？」
歩未（10）「もう一人の歩未を送って来るって」
唯香「そう。じゃあ先帰ってようか。ご飯、作ってるよ」

○住宅街（夕）
唯香・歩未（10）、手を繋いで歩いている。
歩未（10）「ママ、パートじゃないの？」
唯香「うん？　歩未が帰ってくる日だからお迎え行こうと思ってお休みもらったよ」
歩未（10）「……ごめんなさい」
歩未（10）、うつむく。
唯香「え？」
歩未（10）「私のせいで。ごめんなさい……」
唯香「子どもがそんなの気にしないの」
歩未（10）、唯香を見る。
唯香、微笑む。
唯香「おかえり、歩未」
歩未（10）「……ただいま」
唯香「それで？　宿題は終わったの？」
歩未（10）「うん。……いや、ちょっと直す」
歩未（10）、持っているA3用紙を見る。
歩未（10）「ねぇ、ママ」
唯香「うん？」
歩未（10）「ママの未来日記、読んでもい？」
唯香「（驚いて）何でそれ知ってるの？」
歩未（10）、笑う。

○レストラン・店内（夜）
裕太、唯香にリングケースを差し出す。
裕太「改めまして……。俺と、結婚してほしい。一緒に人生を、歩んでください」

唯香、リングケースの婚約指輪を見つめる。

唯香「……裕太は私を選ぶってこと？」

裕太「うん？　うん、そうだね。俺は唯香がいい。だから、唯香も俺を人生の伴侶として、選んでほしいな」

唯香、じっと指輪を見つめている。

裕太「なんて……」

裕太、不安そうに唯香の顔を覗き込む。

唯香「……私の人生には、たくさんの選択肢があって、どれを選べばいいのか、どれを選べるのか、分からなくなるの」

裕太「……子どものこととか、仕事のこととか、俺一方的に考えちゃってたよな。ごめん！」

唯香、裕太を見る。

裕太「これからは、ちゃんと二人で考えよう。二人で、選択肢を作って行こう。俺と唯香で考えれば、選択肢は二倍だよ！　二倍！」

裕太、リングケースから婚約指輪を取り出す。

裕太「これから、選択肢を増やして、どれを選ぶかを決める唯香の隣に、俺がいることを選んでください」

裕太、片方の手で指輪持ち、片方の手を唯香に差し出し待つ。

唯香、裕太を見つめる。

膝の上に置いていた左手を上げようとする。

○会社・会議室

テーブルを囲み、会議が行われいる。

久保「ね、もうさすがヤマバ乳業さんですよ」

テーブルの下で持っている資料を見る唯香。

真弓、気づいて、

真弓「佐藤ちゃん。それ、出さなくていいの？」

唯香「でもあんまり自信なくて」

久保「じゃあ他になければ、これで終わりま

すか」

帰り支度をする他の社員たち。

唯香、テーブルの上に資料を置いて顔を上げる。

○住宅街（夕）

歩いている唯香。

子どもの声「ママー！」

唯香、振り返り微笑む。

【終】